合理性對非合理性の問題を通じて觀たる『極根概念の哲學』（其三）

左右田喜一郎

VII

余は既に他の機會に於て他の出發點より此の問題に逢着し若干の考察を回さゞるを得なかつた。Sollen 又は Wert の其の之によつて可能になりたる個性との關係及び其の各個性間の關係は認識論上如何に見らるべきであり又其基礎づけらるべきであらうか。一方分析論理に從ふて Kant の先蹤を追ふと能はず他方發出論理の道を進むで Fichte の晩年及び Hegel の爲に倣ふことを許さず。更に退いて合理性、非合理性の分岐を既に其の出發點に於て否定すべしとする Bergson の直覺主義に去るを喜ばず。先驗的心理學の道を撰むで遂に超ゆべからざる鴻溝に面し、足地を離

るゝの飛躍によりて先驗的論理學の立場に移り「文章自體」「眞理自體」を稱へたるBolzanoの說に共鳴を感じ、坐ろに近代的價値論化せられたるPlatonのイデア論を想はしむべきRickertの論理主義にも亦少なからず沈思を要求せしめらる。

吾等茲に何を考ふべきか。

想ひは再び「極限概念の哲學」の建設に走せざるを得ない。[2]

（1）（2）拙稿「極限概念としての文化價値」（經濟哲學の諸問題第三版第百九十一頁以下）參照。

吾等が茲に問題とする極限概念は素と數學上の概念を基とするものであるが凡ての非合理性が合理化せられつゝ其の窮極の合理性に對するものとして見らるゝときに甚だ重要なる役目を演ずるものゝ如く余には思はれる。今吾等が問題とする所は何なりやを尋ねて見れば大凡そ左の如く言ひ表はし得るであらう。

非合理性が合理性に對するや何れも皆前既に述べたごとく一個の合理化的過程の裡に入り込めるものとして觀察せられ得るが故に一切の非合理性は凡て謂はゞ合理化せられたる非合理性として解釋せられ得べきである。從つて其の合理化せられたる非合理性に對しては其の合理化の過程に於て其の程度又は濃度を異にする場合の幾多のものを考へ得べきであらう。此の場合に於て其の合理化的過程の

範圍内に於ては合理性は此の幾多の非合理性に對して一個の統一的濃度卽ち意味を與ふるものであるが、此の合理性は一方には非合理性の間に其の合理化的過程に於ける位置を明示すると同時に他方には非合理性の合理化的過程の進行に對して其の歸趣を與ふるものである。此の場合に於て合理性は其の特定の合理的の過程の内に於ては純然たる合理的のものと云ふことを得て些の非合理的成素を含まぬと云はねばならぬ。之に反して非合理的合理性の問題の起るは此の特定の合理化的過程の範圍を超えたる場合に他の合理性(例へば他の價値又は範疇の如き)との比較考察に入る場合に限る。反之其の特定の範圍に於ける合理性は些の非合理的成素を含むことなく凡ての其の範圍内に於ける非合理性に對して歸趣を示すべきである。而かも非合理性に對し合理化的濃度を如何に極端に微妙に考へ得るとしても合理性其のものとなることを得ずして永久に單に合理化せられたる非合理性に終らねばならぬ。恰も判斷の蓋然性を如何に高めても確實性自身とはなり得ざるが如きである。茲に永久に思惟上超ゆることを得さゞる溝がある。吾等の思惟は如何に望むまゝに非合理性をして合理性に近よらしめ得としても之を合理性其のものとして考へしむるを許さない。而かも他方此の合理性があつて之に向つて進

む方向が示されないならば凡ての非合理性は、假令其の内に殆んど吾等の意識の上に區別するを得ざる程、合理性に近いものがあつても其の意味につきて何物をも語ることを得ないから非合理性としての認識其自らさへも吾等には不可能となる。合理性は非合理性を此の意義に於て認識論的に基礎づけしながら猶且非合理性によつては其自らを表示することを得ぬといふ運命にあるものである。即ち合理性は非合理に内在しながら而かも超越して居るものと言はねばならぬ。恰も意識一般は吾等の經驗的意識に内在して且超越して居るといふが如きものである。即ち合理性は一方に非合理性の系列を可能ならしむるものとして其の非合理性の何れにも屬せず其の全體を超越して非合理性の凡てを一定の方向に導くべきものと考へらるゝに、他方には又抑々之をして其の歸趣何處にあるかを知らしむる如き内在的のものとも解せらるゝを要するのである。

此の如き合理性は個性の問題につきて之れを考ふれば外的に基礎を與ふるものとして嚮導的のものとしては價値なりと考へられ、内的に其自身活動發展的のものとして考へられては其の窮極に於て超個的個性として考へらるゝ。而して一方價値は合理性其の儘の姿にありながら非合理性の意味を語ることもあり得と考へら

れ(例へば特殊的價値として解せられたるものは更に高度の他の價値系列に於ては猶ほ個性と解せらるゝ如き)他方超個的個性は非合理性其の儘の姿にありながら合理性其の儘の意味に解せらるべしと要求す。此の如く一方外面的に超越的價値があり、他方內面的に超個的個性の如き超非合理的非合理性があるが、後者が其の價値の表現たり得と見らるゝことは取りも直ほさず延ひて單純なる特殊性より出でゝ個性の問題を形成し得る所以の特定の價値系列全體を貫通する內面的意味其自らを語り得ることゝもなる。

此の如く合理化的系列の內に於て非合理性を可能ならしむる超越的價値は非合理性の純化の窮極に於て其自身の表現として考へられ得る非合理性を思ひ得ねばならぬ。此の表現の可能あるが爲めに價値は一方　越的でありながら又他方內在的なりと考へられ得べきである。

此く一系列中の合理性は一方價値の方面をのみ　ふるときは到底超越的たらざるを得ざるに、他方超非合理的非合理性の方面をのみ考ふるときは畢竟內在的たるに傾くに終る。而して此の兩者共に內在的たると同時に超越的なることが要求せられ、非合理的なると同時に合理的なることが要求せられ、反對に又合理的なると同

時に非合理的なることが要求せらる。此の如くんば吾等茲に何を考ふべきか。

合理性及び非合理性の問題は此の如く解し來れば數學の專門家ならずとも如何に近似の思想を數學の極限概念と其のReihenglieder との間の關係の中に認むるものなるかを直ちに感得するであらう。余は此のSein とSollen との問題の解釋は極限概念の解明によつて或る部分迄は其の步武を進め得るものなることを思はずには居られない。

凡そ認識論上の重要に顧みて極限概念を考ふる場合は二つに分ち得ると思ふ。第一は圓を其の內接及び外接多角形の極限なりと考ふる場合の如く極限に向ふ系列のGlieder たる個々の多角形が其自身獨立して其の極限に近きつゝ進むと考へ居る如き場合であつて認識論上のSollen とSein との關係の多くは此の如く解せられ得るものである。其の程度を異にする經驗的普遍妥當性を有する判斷が各獨立に客觀的絕對的普遍妥當性を具有する判斷に對するが如きものである。第二は

$$\lim_{n=S}\left(\frac{3}{10}+\frac{3}{10^2}+\frac{3}{10^3}+\cdots\cdots\cdots\cdots+\frac{3}{10^n}\right)=\frac{1}{3}$$

に見る如く各自獨立するのみならず各成因相合し相率ゐて極限に向はんとする場合であつて數學上に於ては殊に無理數原理の導入によつて其の重要を增し來つたことであるが如何なる有理數も此

の意味に於て一個の極限なりと考へ得る如く此の如き場合は甚だ多いと言ひ得るが、認識論上 Sollen と Sein との問題としては其の適用を思はしむることは寧ろ少ないと言はねばならぬ。只余は各文化生活の範圍に於て之を見れば認識論的に可能とならしめられたる其の範圍の文化生活(例へば經濟生活の凡ては其の全體の形ちに於て其の範圍に於ける當爲たる經濟的文化價値に近づかんとするものと解するに傾く。人生觀としての「文化主義」は此の意味に解すべきものなることは余の既に他の機會に於て述べた通りである。[3]

(3) 黎明講演集第一輯所載拙稿「文化主義の論理」參照。

此の二樣の見方以外數學上に於ては猶極限の考へを適用する場合も多くあるけれども(例へば並行線の無限の延長に於ける想像的交叉點の如き)認識論上に於て極限概念の助けによつて Sollen と Sein、價値と實在、合理性と非合理性との內在的にして且つ超越的の關係を究明せんと欲する場合には既に以上二の場合を以て其の意味盡せりと謂ふても可なりと思ふ。余は今此の如き場合に於て極限概念は然らば如何なる性質を具備するを要するか卽ち非合理性に對して合理性は如何なる性質を有するを要するかを尋ねて以て此の認識論上の窮極の問題の解明を資けて見た

いと思ふ。

極限概念として考へられたる合理性は其の範圍内に於ける系列の非合理性に對しては其の合理化的過程の上に如何なる位置を占むるやが先づ問はるべきことである。或は其の系列の中に屬するか或は之に屬せざるかゞ問題であらう。第一の例は $1, \frac{1}{2}, \frac{1}{3}, \frac{1}{4}, \cdots\cdots \frac{1}{n}, \cdots\cdots$ 0の系列に於て0は極限であつて且つ此の系列の中に屬するものであるとなし得られ、第二の例は $\frac{1}{2}, \frac{1}{2}+\frac{1}{4}, \frac{1}{2}+\frac{1}{4}+\frac{1}{8}, \cdots\cdots \frac{1}{2}+\frac{1}{4}+\frac{1}{8}+\cdots\cdots \frac{1}{2^n}$ の極限としては1であつて而して此の1は今見た分數の系列には屬せずとも見られ得べきものである。[4] 此の場合數學上に於ては色々議論の餘地もあることゝ思はれるが認識論上に於ける合理性と非合理性の問題としては合理性は或は其の系列の中に屬すとも見られ得或は之に屬せずとも見られ得る所に數學上に於ける極限概念と同樣に微妙なる且困難なる問題が横はるのである。數學上に於て圓と多角形とに於ける如く圓は多角形の極限と考へられて其の系列の最後のGliedをなすとも考へられ得ると同時に、圓は最早多角形に非ずとも言ひ得る、同樣に線の長さの減少する場合の極限は點なりと考ふる時、點は其系列の極限として最後のGliedとして其の系列の中に屬すと見得ると同時に點は最

早如何なる短き線にも非ずとの意味に於て其の系列の外に屬すとも曰ひ得らるゝであらう。吾等の當面の問題に於ても同樣である。合理性は合理化的非合理性の最後の歸趣として例へば意識一般は經驗的意識の、超個的個性は非合理的 „Meinheit" たる個體の、客觀的に普遍妥當なる判斷は經驗的蓋然的なる判斷の最後の歸趣目標として且つ其の程度上の差異を漸次に減縮して窮極に到達し得べき極限として其の系列の中に屬すべきものと考へられ得ると同時に、他方には意識一般と經驗的意識とは、超個的個性と非合理的個體とは客觀的普遍妥當なる判斷と經驗的普遍妥當なる判斷とは其の性質を異にするものなりとして此の系列の中に屬するものに非ずとも考へられ得べきである。此の如く合理性對非合理性、價値對事實、Sollen 對 Sein の問題に於て前者は或は其の特定の後者の系列の中に屬すとせられ或は之に屬せずとせられ得るは卽ち上下數千載を通じて幾多の哲人思想家が畢世の能を竭くして其の解決に從はんとしたる問題の中心點をなすものであつて余は不敏且つ之にも拘はらず不遜ながら此の如くしても猶ほ未だ解決せられ了りたる問題なりと考ふることを得ざるものである。恐く凡ての哲學の出發點と到達點とは茲處にあるものと解して誤まりなきに庶幾きものであらう。

（4）Benno Kerry, System einer Theorie der Grenzbegriffe. 1890. s. 132—5 參照。Ubrigens 余は哲學上の極限極念を考ふる凡ての研究者に向つて量に於て甚だ小さき而かも隱れたる此の少壯學者の此の著作に對して相當の注意を拂はれんことを希ふものである。

合理性が一方に非合理性の系列の中に屬すとせられ他方に、之に屬せずとせらるゝ此の不卽不離の關係は然らば認識論上何を語るものであらうか。

假りに合理性が此の系列自身の中に屬すとするの方面をのみ見るに止まるときは合理性は如何なる意味に於て非合理性と對するやは究むべくもない。何となれば此の場合には合理性も非合理性もひとしなみに系列の中にあつて一以て他と分つ所以はあり得ないから合理性と非合理性との對立は全然滅却し去らるゝが故に其の間に何等の系列も認むべくもなく又其の系列の內的意味を語るべき何物もなきに至るであらう。嚴格に曰へば何故此の如き合理性と非合理性とを結び付けて考へ得るかすら解すべからざることゝなるに至る、撰擇の標準すらないからである。今茲に言ふ合理性を價値と解するときには此の立場は卽ち功利主義、快樂主義、實用主義の心理主義的經驗主義の立場を表明するものであつて妥當性につきて何物をも語るの根據を失ふものである、從つて善惡、美醜、眞僞の價値判斷は全く之を下すこ

とを得ず卽ち最も善き場合を想像しても經驗科學の立場に墮ち哲學の根本的破壞とならねばならぬ。若夫第二の合理性は非合理性の系列の外にあることをのみ顧みるに止まらば合理性は如何にして非合理性をして一個特定の系列を形成せしむるに至りたるやの意味の上に於ける交涉は全く尋ぬべくもない。非合理性を導いて合理性に向はしむることは全く考ふることを得ざるものとなる。從つて非合理性を誘ふて系列に入らしむること其自身不可能となるが故に其の系列の極限として合理性を考ふべしとの事は全く無意義となり終る。是凡ての形而上學が經驗につきて何物をも語るを得ず從つて反對に如何なることをも語らんとし又語る所以である。

此の如く觀じ來れば合理性が非合理性の系列の中に屬する方面をのみ見ることを得ず、哲學は生るゝことを得ざればなり。反對に合理性は非合理性の系列の中に屬せずとするの方面をのみ見ることを得ず、哲學の死を意味すればなり。然らば卽ち合理性は非合理性の極限概念として其の系列の中に屬すと考へらるゝと同時に又其の中に屬せずと考へられざるを得ないものとなる。卽ち合理性は非合理性に對し、價値は實在に對し、Sollen は Sein に對して內在的にして且超越的なりとせらる

ゝ所以である。茲處に哲學の問題がある。

而かも是矛盾にあらざるか。

圓の半徑を無限に縮少せしむるときは圓周は遂に集まつて點となる。點は圓の極限である。內接及び外接多角形の邊を無限に增加せしむれば多角形は遂に圓に合す。圓は多角形の極限である。振子の運動を無限に縮少せしむれば靜止となる、靜止は運動の極限である。而かも點を以て圓となすものはなく、圓を以て多角形となすものはなく、靜止を以て運動となすものはない。認識論上合理性の問題は數學上の極限と其の性質を同ふする。如何に之を解釋すべきであらうか。

合理性が非合理性の系列の中に或は屬すとし或は屬せずとせらるゝことは一個の矛盾に非ざる限り全然同一の意味に於て主張し又は考へられ得られざるべきは明かである。他方此の一見矛盾に等しき合理性對非合理性の不卽不離の關係は依つて以て哲學其自身の內面的問題を形成せしむる所以であるとすれば之を以て矛盾と解することを許されざる論理がなければならぬ。然らば合理性が非合理性の系列の中に屬すと考へらるゝことゝ之に屬せずと解せらるゝことゝは矛盾に非ずして、同樣の妥當性を以て意味せられざるべからずとするならば、其の意味せらるゝ

對象は一つであつても其の意味の平面又は方向を異にするものでなければなるまい。問題は然らば其の意味せらるゝ對象は何ぞ、其の意味の平面、方向の異なれる二つのものとは何ぞと曰ふことに歸さねばならぬ。

先づ後者の意味の平面又は方向につきて見れば第一の合理性、價値、當爲が非合理性、實在の系列の中に屬すると見らるゝ場合は然らば如何といへば此の場合には直接に非合理性をして合理化的過程の中に入らしめ、之を系列の中に導き價値づけを行ひ兼ねて其の目標となるとの意味に於て合理性は內に向つて非合理的に對して其の意味を語るものである。謂はゞ回顧的とも曰へよう。反之合理性が其系列の中に屬せずして之を超越するものと解せられ得とする意味の平面は何であるかといへば抑々非合理性をして系列に入らしめたる內的意味 Unterlage の一方的高昇及び其の絕對的純化によつて達せられたるものは最早其の系列の概念を以て律することを得ず更に新なる他の平面に於ける他の合理性と共に自ら合理性でありながら復た謂はゞ非合理性の系列を形成して更に高き、正しく曰へば他の一方的純化の方向に移ることを意味するものでなければならぬ。外に向ふものであつて謂はゞ前進的とも曰へやう。卽ち前者は第一次的平面に向ひ後者は第二次的平面に向ふもの

であつて而して其の意味せらるゝ對象自身は第一次的及び第二次的平面の限界に立つとも考へ得られよう。一に對しては到着點であつて他に對しては出發點である。此の如く第二次的平面の意味を內的に具有して之を豫想することなくして第一次的平面にのみ向ふ間は前云ふた如く哲學は生れないし、第一次的平面に於ける意味を備へずして第二次的平面に向へば哲學は死するより外はない。

問題は寧ろ此の如くして此の二つの意味を其自身に統一し得と考へられたる意味の對象如何といふことにあるであらう。若し此の意味の對象が統一體でないならば二つの異なれる意味の平面又は方向あることは當然であつて各別に一に心理主義に陷り他は形而上學に昇らざるを得まい。茲處に哲學の問題を可能ならしむる所以は此の二つの平面又は方向を有する意味の對象が唯一にして且つ統一せられて居ることの立證にあらねばならぬ。

再び數學上の問題を考へて見るに圓に外接せる多角形の邊の數を無限に增加する時の極限は其の圓であるが又其の圓の直角に交はる直徑を一は短小、他は延長すること無限なれば楕圓を通じて遂に圓は其の極限たる直線となる、又或る他の方向を考ふれば其の圓の半徑を間斷なしに且つ無限に縮少せしめたる時は其の圓は遂

に極限點となる。此の場合に圓と多角形との關係に於て前者が後者の系列の中に屬せずと見らるゝ場合は卽ち多角形に對して圓なる一の異なつた概念が形成せらると見る場合であるが之は最早圓と多角形とが或る特定の系列を形成せしむべき一定の內的意味又は Begriffsmerkmal の關係に於て見らるゝことを離れて、其の極限たる圓が上の例に於ては直線又は點に向ふ系列に入るの出發點たる非合理性として解せらることを意味するものである。單純に圓と多角形との封鎖的內的關係に於て殊に多角形の邊の數を增加するといふ一方的意味方面の指し示されたる範圍だけの內に於ては、四邊形が五邊形、六邊形に移ることが抑々思惟上に於て可能なりとして許さるゝの根據ありとせらるゝ以上は同じ可能を以て考へられ得べき——語弊を看過するを許さるれば——vorletzes の多角形より極限圓に達することは當然考へられ得べきことであつて、此の際の多角形といふ意味に於て圓も亦多角形なりと曰ひ得べき程の共通要素を其自身に包含するものと曰はざるを得ない。而かも „Alles in seiner Art Vollkommene geht über seine Art hinaus" なるものであつて圓は最早多角形に非ずとせられ其の意五邊形は四邊形に非ずといふものとは甚だ異なるものありとせらるゝ所以は上の例に於て圓は既に直線又は點に對するものとして考へ

らるゝからである。此の故に圓より直線に向ふ方向の上に横はれる如何なる楕圓又は圓より點に向ふ如何なる圓も前の多角形に對しては最早何等の交渉にも立たず全然超越的なることは云はずして明かであらう。若し之にも不拘此の前後の例を以て一個の意味の上に於て連續一貫せる系列なりと見んと欲せば更に別個の觀點を要すべきである。

之によりて考ふれば吾等の問題とせる意味の統一的對象なるものは要するに二つの意味の交叉點であると云ひ得る。一は多角形の一より他に移るの可能性としての意味(多角形の邊の數の無限の增加)と他は圓の楕圓より直線又は圓より點に移り得る可能性としての意味(直角に交はる直經の無限なる一は短小一は延長又は平徑の無限の減少)であつて此の二は圓に於て其の交叉點を見出したものである。

Reihenglieder の一より他に移り得るの可能は卽ち其より極限に移り得る可能其のものである。而して一系列をして一系列ならしむる所以は卽ち此の可能性たる意味に外ならぬ。然るに此の交叉點より見て受動的並に能動的なる二つの可能性は意味の上に於て連續的に一貫せりとも亦然らずとも考へられ得るのであるが何れにしても其の交叉點に於て意味の轉換あること丈は明である、卽ち一系列には一

個の意味を有するに過ぎぬと見られ得る。

此の如く考ふる場合に於て意味の交叉點として合理性に對して之を意味轉換の主軸として考ふることを許さるべしとすれば今見たる例に於けるが如く啻に二個のみならず更に多くのものを考へ得るであらう。此の如くんば非合理性の系列を成立せしむる所以の意味は一定の合理性に對する解釋の或る特定の方面に過ぎぬことゝなる。併し此の如く交叉點を中心として之より各方面に意味の方向を發出的に考ふることは今迄辿つた論理とは其の方向を同じくしない。今迄吾等は一方向の極限として合理性を見、之より更に之を出發點として他の方向に走りて他の極限に達すと見たのである。此の意義に於ける意味の交叉點は謂はゞ連續せる二方向に於ての通過點であり、意味轉換の主軸としての交叉點は之に反して數多の方向に對する凡ての出發點となる。所謂超越的心理學と超越的論理學との立場の相違に比すべきものである。此の二を混淆することを許さない。吾等は今茲には吾等の論理の達し得る處迄通過點としての交叉點を考へねばならぬ。

此の如くして一系列の意味は他の系列の意味に依つて何等の變換制約を受くることなきものとして封鎖的に考へては他の系列の意味の何たるやは知ることを得

ないが其の系列以外に他の系列が可能なりといふこと丈は極限概念の成立に對する條件たりとも見られ得べきである。換言すれば如何なる極限概念も一の意味に對しては合理性であり他の意味に對しては何等かの意義に於て非合理性である。故に極限概念の意味は其の一個特定の範圍に限定せらるゝ限りに於て他方に何等かの意義に於て非合理性として解せらるゝの可能性だけを含む所の合理性なりと解せざるを得ない。是余が如何なる合理性も非合理性として解さるべきものなりとする所以である。換言すれば極限概念は一方に於ては合理性他方に於ては非合理性であつて統一的なる意味の對象としては二つの意味の交叉點として考へられたる、Contradictio in adjecto を許すならば非合理的合理性と呼ばるべきものなりと曰はねばなるまい。

茲に於て進むで吾等に問題となるは此の如く解せられたる非合理的合理性とも呼ばるべき意味の對象が極限と其の Reihenglieder 合理性と非合理性とを結び付くる Oberbegriff と如何なる關係にあるやといふことである、卽ち此の如き系列を可能ならしむる意味其のものと極限との關係如何といふことである。圓と多角形との例ならば邊の數を無限に增加することに依る多角形の一より他に移る謂はゝ élan vital,

經濟的文化生活の極限として經濟的文化價値を見るならば之に內在的なる經濟的文化的といふことは共に夫々の系列に共通の根基たる所謂Oberbegriffであるが各例に於ける極限を之に對立せしめて考ふるときは卽ち後者は此の系列の共通根基の理想的構造體といふべきものである。卽ち非合理的個體に對する超個的個性經濟的文化生活に對する經濟的文化價値等夫々共通根基は普遍なるものであるが其の系列範圍の極限は其の意味をOberbegriff卽ち內容的制約として最後まで保有する其の系列に於ける非合理性に對する理想的構造なりといふべきである。換言すれば極限は其の共通根基たる意味の理想體又は理想的表現である。之をしも猶ほ非合理的合理性といふ所以は此の共通根基の表現體が次の他の系列に於ては非合理的なる一Reihenglied として他のGliederと相對するに至るの可能性を前提するからである。此の故に其の表現體は一言にして言へば常にSeinに對するSollenたるべきものであるが只內容的制約の種類の異るに從つて種々の形態形式を採り得べきものであるといへる。或は人格ともなり義務ともなり意識一般ともなり價値ともなるは單純に內容的制約の性質に從つて之に適應すべく表現の形式を異にするに過ぎない共に其の系列に於けるSeinに對するSollenなるに至つては一である。

此の如く考ふれば吾等の問題とする統一的の意味の對象なるものは極限概念を考へ得る一系列の共通根基を爲す所以のものと、他の系列の共通根基をなす所以のものとの交叉點であると解すべきである。此の場合に此の如き共通根基を表現すべき合理性が極限としての圓、點、線又は今曰ふた如く價値、個性、意識一般としての如く樣々の形態に於て表はるゝとしても此等は皆所謂系列の共通根基たる內的意味に對するときは皆等しく當然且つ必然なる implicite に決定せられてある表現たるに過ぎぬといふことが出來る。意味は其の系列の共通根基の外になく極限概念は其の單純なる表現と見らるべきである。故に若し此の系列可能の共通根基を言ひ表はすに Prinzip 又は Kategorie の語を以てし得るならば極限概念は當さに其の Prinzip 又は Kategorie の單純なる Äusserung に過ぎないといふべきである。而して既に之を Äusserung なりといふに於ては他の系列に於ては亦一個の非合理性として見らるゝを得べしといふことは寧ろ甚だ當然であるが此の場合に於ても亦畢竟前者と同樣の關係を更に新しき關係に於て繰返すものである。卽ち合理性と非合理性との論理的關係は復た此の場合に於ても前者の場合と同樣に繰返すものといふべきである。此の如きは畢竟するに吾等の認識幷に思惟が下より上に向ふ間卽ち形而上學

に入らざる限りは到底二元的なるを免れ得ぬものなりといふことを意味するに過ぎざるものであらう。

此の如くして吾等が問題としたる意味は其の系列をして抑々可能ならしむる所謂共通根基たるPrinzip, Kategorie又はErkenntniszweckであつて之が一旦其の之に適應する表現を得るときは此の共通根基たる內的意味其のものは內容的制約を含むと解せらるゝ表現を得て他の系列中に多くの非合理性と幷んで新なる他の系列の極限に向ふことの可能を含むものである。一系列の極限概念は其の系列の內的意味の表現であり而して二つの異なれる意味の交叉點である。吾等の研究對象は此の如くして寧ろ極限概念其のものにあるにあらずして其の系列の共通根基たる內的意味になければならぬ。此の意味の爲めに其の中に含まれて非合理性なりと解せらるゝものは所謂合理化せられたる非合理性として、又極限たる合理性は非合理的合理性として解せらるゝに至るのである。問題の中心は其故に飽くまで極限たる合理性(價値、當爲)をして合理性たらしめ、之に對するReihenglieder たる非合理性をして非合理性たらしむる所以の其の系列の共通根基たる意味其のものに外ならぬ。然らば此の意味其自らは復た合理的なりや將た非合理的なりやといふに、こは更に進

むで他の領域の問題に屬するが、要するに極限が合理性なりや將た非合理性なりやといふ問題と全く其の性質を同ふするものであると曰ひ得べきであらう。何となれば極限が合理性なりといふ意味は其の系列の共通根基たる意味が其の絶對的表現を得たることであつて其の之に達する系列の Glieder が非合理性なりといふは其の共通根基たる意味の表現に unwesentlich なるものを其の中に認むるが爲めである。故に共通根基たる意味其のものは其の系列内に於て封鎖的に考へらるゝときは相對を絶するものであつて合理性 schlechthin なりと曰はざるを得まい。嚴格に曰へば合理性對非合理性の相對をすら絶するものと曰はざるを得まい。其の表現を捉へて初めて第二次的に合理性なりと曰ひ得る程のものであらう。恰も生命の物質條件としての太陽熱を考ふる場合には其の封鎖的内面的意味に於ては太陽熱は何れの生命にも不可缺的遍通の物質條件なりとの意味に於ては此の條件の活動を妨ぐるもの又は其の活動に對して unwesentlich なりと考へらるゝものを稱して非合理的なりとするに對して太陽熱たる物質條件其自らは絶對的とも合理的とも稱へ得るに等しい。飜つて極限に依つて表現せらるゝ系列の共通根基たる意味が非合理性なりと見られ得る場合は卽ち其の系列の意味が他の同樣なる系列の共通根基とし

ての意味と相對立せしめられて更に第三の他の系列に於ける一員として新なる極限又はOberbegriffに對して其の意味を比較せらるゝ場合である。卽ち此の場合には各系列に於ける極限が各々謂はゞ新なる他の系列に於て非合理性として取扱はれ其の系列の意味に縛ばられて純化の方向に進むものと解せらるゝ場合を指す。猶ほ太陽熱が生命の他の物質條件と並列せられて考へらるゝ場合に其の凡ての係はるべき物質條件全般なるOberbegriffの下に其の意味が比較計量せられて考察に入り共に相對的非合理的と思はるゝ如きものである。之によつて考ふれば或る一個特定の系列內に於て其の共通根基をなす意味其自らが合理的なるや非合理的なるやの問題は全く極限が合理的なるや非合理的なるやの問題と其の性質を同じくすべきものであつて、之に對しては絕對的の解釋を與ふるを得るものでなくして其の意味の平面を異にして解釋を與へらるべきものであると云ひ得る。

以上の如く解するときは意味の對象は其の解釋の平面を異にするものを有し得るが、其の對象自身は交叉點として唯一にして而かも統一的のものであり得といへよう。卽ち一系列の意味の絕對的純化の表現は統一的であつて其の系列に對しては極限をなし他の系列に對しては單なる一員をなす。茲に矛盾あるが如く見ゆる

けれども實は意味の對象は唯一であつて只其の意味の平面を異にするに過ぎないと見るべきである。

茲に於て進むで考ふべき問題は此の如き統一的の意味によつて結び付けられたる合理性と非合理性とは其自身に於て一個の自足完了せる統一體をなして封鎖的に考へ得らるゝといふことである。Prinzip, Kategorie, Erkenntniszweck を其自身に含む Sollen と Sein との結合體を其の系列の範圍内につきて考ふれば一個の封鎖的完了體をなすものとして考へ得らるゝといふことである。例へば經濟的文化價値と經濟生活とは自足完了の統一體をなし高次の系列に於て或は藝術的或は法律的或は政治的等の文化價値と夫々の文化生活との同じく其自身は自足完了せる封鎖的統一體に對するが如きものである。此の如き統一體を形成せしむる根基は卽ち所謂意味其自身として上來問題とし來つた如く夫々の系列に對する Trinzip, Kategorie 又は Erkenntnizweck である。而して此の如き共通根基の意味によつて又凡ての Begriffe は出來るとも云ひ得べきである。

此等の共通根基としての意味は其故に合理性と非合理性とを結び附けて自足完了の封鎖體を形成せしむべき所以であつて其の之に適應せられたる表現を得たる

ものは認識論上に於ける凡てのapriori に外ならない。即ち凡てのapriori は其の係はる範圍内に於ける極限概念である。其の範圍内に於ては合理性其の儘のものと云ひ得るけれども他のapriori に對するときは即ち更に其apriori のapriori に向つて系列を作るの意味に於ては内容的制約即ち合理性中の非合理性の問題を思はしむるものとなるのである。此の如く解すれば凡てのapriori の問題は即ち極限概念の問題となる。

此の問題は永久に繰返さるゝものであつて認識論上に於ては非合理的合理性の極限とも曰はるべき何等の内容的制約をも思はしめざる如き合理性schlechthin なるものは考へられ得ない。神すら何等の内容的制約を附することなくしては吾等には思惟の對象とはなり得ない。而かも之を合理性schlechthin なりといふものあるは猶ほ一個特定の範圍内に於て其の特定のapriori は其の範圍内に限りて合理性schlechthin なりと曰ひ得ると全然何等異なる事なく只此の兩者に於て其の共通根基としての意味の相違は即ち是ありといふに過ぎざるものである。而して此の如き意味の相違を云爲するは勿論、意味其自身をすら先づ認むるは他の意味との何等かの相關的關係を豫想することなくしては不可能である。自我は非我なくして考ふ

べからざるに等しい。

合理性と非合理性とは此の如く考ふることによつて其の關係を普遍の特殊に對する關係の如く考へんとする分析論理に陷るを避け、他方には此の兩者の關係を見るに當つて全體は部分を要求し部分は又各部分を先天的に deduzieren する如き發出論理の形而上學に入ることを防ぎ得よう。而かも極限概念によつて合理性、價値、當爲は其の特定の系列中に於ける非合理性たる事實に意味を與へ、各非合理性は又他の非合理性の內的意義を明にし兼ねて其の之をして抑々可能ならしめ又其の目標たる合理性を仰ぎ觀せしむる如く形而上學に陷ることなくして猶ほ能く恰も全體と部分の考へによつて求めらるゝ形而上學の要求を滿たすといふことが出來よう。加之合理性と非合理性とは極限概念の考へによつて渾然融合の統一體を形成するを得るは當さに全體と部分とが相融和して自足完了の統一體をなすべしとするの要求に當る。卽ち das Synthetisch-Allgemeine をして bestimmende Urteilskraft に屬せしむるを以て形而上學の誤りに陷るものなりとするの非難を離れて而かも認識論の範圍に於て其の要求の全部を滿たさしめ得るものである。乍併此の如く極限概念によつて合理性對非合理性の問題の解釋となすことは、前段既に見たる如く一概に數學

上の概念を以て直に對象認識に向はしめんとしても其處には數學上の概念構成の如く對象相互の間に Kontinuierlichkeit と Konstruierbarkeit とを缺くものなるが故に數學上の概念は形而上學に入らずして而かも形而上學の要求を充たし得るの故を以て直ちに之を援用して對象認識の場合に於ても亦此の概念を適用するを得べしとする如き立言をなし得るものではあるまいといふ可能的非難に對しては餘り之を以て此の吾等の場合には當れりとは思はない。何故なれば余が對象認識に對して數學上の極限概念と同樣の考へを其の解釋の鎖鑰となすべしとの事を曰ふは此の極限概念を豫定することによつて凡ての對象認識を全然先天的に之よりして Konstruieren すべしと主張するものではないからである。此の如くんば純然たる形而上學に陷る。余は對象の認識に於て數學上の極限概念と同樣の論理的構造を見るを得べしと主張するは唯だ其の對象認識の基礎としての Sein に對する Sollen 實在に對する價値,非合理性に對する合理性の性質が恰も數學上に於て一特定の系列に於ける Reihenglieder と其の Grenze との關係と全く其の構造を同じくするものなるの故を以て此の數學上の極限概念の考へを指針として此の認識論の問題を考察すべしといふに過ぎない。余が今迄記述したる範圍に於ては Sein と Sollen との問題

殊に合理性中に於ける非合理性の問題並に非合理性中に於ける合理性の問題は此の概念によつて遺憾なく其の論理的構造を説明し得らるゝ一個の認識論上の立場あることを示し得たものと信ずるのみである。余は之によりて形而上學にも入らず神秘主義にも退かずして此の合理性、非合理性の最後の問題を明白に解釋し得る認識論上一個の立場なることを主張して見たいと思ふに過ぎない。之より進むで凡ての對象認識の問題を凡て數學上の概念によつて解明し終らんと欲する如きは余の企てんと望む所でもなく又企て及ぶ事でもない。只認識論最後の問題たる吾等の論究題目は數學上の極限概念によつて其の問題の性質を頗る鮮明ならしめ得解釋の道に一歩を進め得べきことを主張して見たいと思ふに過ぎざるものである。

此の如くSeinとSollen價値と實在との關係を極限概念によつて解釋するは恰もKantが有機體に對して說きたる如く各部分部分は其自らZweckにして又交互にMittelたり又全體と部分とは交互に之を要求するが故に全體は部分によつて成ると見らるゝは勿論全體によつて部分の„Beschaffenheit"及び„Wirkungsart"[5]は決せらるとするのTeleologieは悉く其の特定の極限概念の係はるべき範圍に於ても亦認識論上の論議として妥當なりと曰はれ得るであらう。Lotzeの所謂SollenはSeinに先行

すとは此の極限概念の考へによりても說き得らるべきことである。Hegel の先蹤に倣はず Fichte 晩年の形而上學的歷史哲學の價値說に陷ることなくして吾等は「極限概念の哲學」によつて能く其の要求の凡てを滿たし得べきである。Apriori と Aposteriori, Sollen と Sein とは極限と Reihenglieder との關係として見るべきものなることを余は此の機會に於て更に提唱して見たいと思ふ。(未完)

(6) I. Kant: Kritik der Urtheilskraft (Reclam Ausgabe) S. 296